池の改修・蓮をかたどる泉

裏山の絞り水が溜まって自然に出来ていた池を改修。中の島を無くして水面を岩屋の足元一杯まで広げた。北の縁は大きな真鶴石を崩れに積み、石の間には水辺の草を配して力強さと自然な気配とを計っている。

ロビーに連続した露台と池との接点に設けた泉は彫刻家・中村真木氏（庫裏中庭の彫刻「生々世々―時の流」の作者でもある）による。イタリア・カラーラ産の白い大理石から湧き出た泉水は、波紋を広げながら池の水へ、蓮の花へとつながる。

芦野石のさざ波と実生の黒松

ツツジの雲海の流れは庫裏に沿って寄せ返す波に姿を変える。波に見立てて据えた石は、那須近くの芦野でとれる安山岩で、芦野石と呼ばれている。通常切り出しサイズは三尺の定尺となるが、今回は波の伸びやかさを表すために、切り出しをする白井石材に特別に長いものをお願いした。また割って現れた割肌と切り出した鋸目をそのままにしたものとを取り混ぜて配して波のうねりを表した。

縁に立つ黒松は、もともと岩崖の下に実生で育ったものでったが、この位置に移したことで、その姿その枝振り共に伸びやかに見え、得難い景色を作りだしてくれた。

岩崖と洞窟

その高さ、その長さ、岩肌の重なり。岩崖は自然の造形美である。池水に姿を写すその静かな迫力は、この庭の大きな特徴といえる。岩面にうがたれた洞窟のいくつかは、寺の建立よりも古いとされる。その中の一番大きな洞窟は、堆積した土を取り芦野石を敷いたところに、陶芸家・藤原郁三氏による陶製の邪鬼「一念鬼」が据わり、灯のともる時その姿が池水に映える。

新本堂正面の松

本堂の正面に何を植えるか。春の彼岸に彩りを添える花木などうか、サクラは、カイドウはと、堂々巡りであった。姿、大きさ、力強くしかも品格を持つもの。そんな悩みの中から、たどり着いたものが黒松であった。古来松は、格式高く日本の伝統を象徴する樹木でもあり、本堂正面にふさわしい。

しかし昨今の松はほとんどが庭木に仕立てられ自然な力強さが足りない。あちらの山、こちらの畑と、聞き回って探した。いま正面にしっくりと据わっている松は、九十九里浜近く、畑のあぜ道にぽつりと一本、絵に描いたように立っていたものである。時と共に、その力強く自然な姿が本堂にふさわしいものになる予感があった。

植込みに際しては、その吊り上げから位置決めまで、とても慎重を期するものだとあらためて知った。重心は定めにくく、やわらかな木肌は剥がれやすい。姿には裏表がある。樹木を据える勘と手際に一日には成らない職人の技があった。

※印撮影＝箱根植木

▶芦野にある芦野石の石切場。レールに乗った白走式チェーンソーで切り出す。※

▶石を敷き込む。平らな面、割肌の面、タマリュウを植える部分を組み合わせている ※

▶カットした側面は平らになり、底面は割肌になる。寸法の石の大きさは定尺サイズだが、もっと長さが欲しいので特別に長いものを切り出してもらうことになった。

▶洞窟の中に邪鬼「一念鬼」が据わった。本堂からは鬼門の方角にあたる。

▶大きな洞窟の中の堆積土を取り除き石を敷く

▶九十九里浜の近くにたたずんでいた黒松

▶クレーンで吊り上げて植え込む

▶正面左側には小振りな黒松を選んだ

▶芦野石の連なりを波に見立てている ※

◀露台の先に据えられた水盤。カラーラ産の大理石で蓮の花をイメージした。